平城京殺人事件

「長屋王の変」異聞

長編歴史推理小説

深谷忠記

光文社文庫

光文社文庫

長編歴史推理小説
平城京殺人事件「長屋王の変」異聞
著者　深谷忠記

2004年12月20日　初版1刷発行

発行者　篠原睦子
印刷　萩原印刷
製本　ナショナル製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話 (03)5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© Tadaki Fukaya 2004
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73801-X　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編歴史推理小説

平城京殺人事件

「長屋王の変」異聞

深谷忠記

光　文　社

目次

第一部　ある小官吏の選択　5
第二部　後れてきた皇子（みこ）　131
第三部　無明（むみょう）の闇　215
解説　細谷正充（ほそやまさみつ）　352

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部　ある小官吏の選択

1

東人（あずまひと）は、足音がしないかと物置の中で耳を澄ましていた。

入口の引戸は開けてある。

隣家の庭との境には、低い柴垣が築かれているが、両家の東側の畑は細い水路で仕切られているだけなので、富根女（おねめ）は自由に越えて来られる。

隣家の娘・富根女は、東人より十歳下の十八。幼馴染であり、恋人でもあった。

東人は、現在、式部（しきぶ）省の大学寮に所属している「式部留省（りゅうしょう）」の身分である。位階はなく、無位。役人にはちがいないが、定まった勤務先は持っていない非常勤の番上官（ばんじょうかん）だ。富根女とは、勤め先がきちんと決まっている常勤の長上官（ちょうじょうかん）になったら結婚する約束をしている。

東人と富根女の逢引の場所は、たいていここ、東人の家の物置だった。隅に鍬（くわ）や鋤（すき）が置いてあるし、藁（わら）も積まれているが、入口近くに、抱き合うには充分な、縦一丈（約三メートル）横半丈ほどの作業用の空間があるからだ。

東人の下腹部はすでに緊張しきっていた。興奮で息苦しいぐらいだ。三十前の健康な男子

が二ヵ月以上も女の肌に触れていないのだから、当然だろう。
畑のほうで、かさかさっという小さな物音がしたかと思うと、富根女の姿が北側の入口の前に現われた。
母親の眼をかすめて抜け出してきたのだろう、息を弾ませている。
富根女の身体を覆っているのは、下穿(したばき)きを除くと、膝の上までしかない麻製の薄い袍(ほう)一枚。呼吸とともに上下する胸のふくらみが、東人の視線を引きつけた。
東人は、一刻も待ちきれない思いで富根女の手を取り、物置の中へ引き入れた。
富根女は、そのまま東人の胸に上体をあずけ、倒れ込んでくる……はずであった。後はしばし唇を合わせてから、引戸を閉め、すでに敷いてある筵(むしろ)の上で互いの身体をむさぼり合う、といった段取りだった。いつもそうだったように。
だが、今日の富根女は、東人の予想に反し、彼の腕の中におさまらずに、するりと横に逃れた。
東人は、驚いて恋人の顔を見やった。
地面に松の木の影を長く投げている夕陽のために、中はまだ暗くない。
富根女は、東人の顔を見なかった。
身体を少し横に向け、薄く黄色に染めた袍の胸のあたりを左手でおさえて俯(うつむ)いていた。
東人は怪訝(けげん)に思い、

「どうしたんだい？」
と、訊いた。
富根女は答えない。
「どうしたんだよ、何かあったのか？」
富根女は、相変わらず顔を下に向けたまま黙っている。
いったい何だというのか、と東人は腹が立ってきた。ようやく休暇がとれて、二ヵ月ぶりに会えたというのに。そして、ぐずぐずしていたら、近くの東市まで買物に行った母親が帰ってきてしまうというのに。
――何だ、おれの何がそんな気に食わないんだ！
と、荒らげた声を出そうとして、あ、そうか、と東人は気づいた。胸の中で、自分のうかつさを嗤い、なんだ、そうだったのか、とひとりで合点した。そうか、富根女は拗ねているのか……。
「おれがなかなか帰らなかったので、おまえは怒っているのか？」
東人は、笑いながら優しく訊いた。
富根女がようやく顔を起こして、東人を見た。拗ねているといった顔ではない。何かを思いつめているような表情だ。
「どうした、おれが留守の間にやはり何かあったのか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東人は笑いを引っ込めた。

「わたし、もうこれ以上、あんたを待てないわ」

と、富根女がひたと東人の眼に視線を当てて言った。

なんだ、富根女はやっぱりおれの帰りを待ちわびて、怒っていたのか……。

それにしても、綺麗だ、と東人は思う。笑顔も可愛くて魅力的だが、こんな顔をすると、ずっとおとなびて見える。意志の強そうな細い切れ長の眼、ふっくらとした頬、そして小さな鼻と口……。化粧をしていなくてもこれだけ綺麗なのだから、髪に金や玉の飾りをつけ、綾や錦を身にまとえば、貴人の娘や采女たちだって富根女に敵う者はあまりいないだろう。

それに、身体は小柄ながら、大きな胸と尻……。

思い出したように、東人の下腹部がうずいた。

「だから、早くこっちへ来いよ」

東人は、富根女の右の二の腕をつかみ、抱き寄せようとした。

しかし、富根女は、

「いやっ！」

と、身体をひねって東人の手を振り切り、前以上に強い態度で拒否した。

「もう機嫌をなおしてくれよ」

東人は下手に出た。「おれだって、どんなにおまえに会いたかったか。四、五回は請暇解

を出したんだ。それなのに、いつも独り者は後回し……今日、やっと二日間の休暇が取れて、退家できたんじゃないか」

これは事実である。

廟堂の首座である左大臣・長屋王の発願によって、大般若経一部六百巻の書写が始まったのは本年、神亀五年（七二八年）の五月十五日、夏の盛りだった。月の初めに降った大雨で佐保川と秋篠川が氾濫し、左・右京のおよそ南半分が水浸しになり、東人の家も富根女の家も、水が退いた後の片づけやら干しものやらにおおわらわになっていたときだ。それが、今やもう秋……今日は七月二十日である。この間、東人は、長屋王の別邸・佐保宮に隣接した写経所で、泊まり込みで仕事をしてきた。

この写経所は、元は長屋王が設けた私的な施設だったが、現在は中務省の図書寮の管掌になっている。今回の写経では、佐保宮の判官が検校使の一人として検査、監督に当たっているが、別当（所長）をはじめとする主な所員は、中務省の図書寮、陰陽寮、式部省の大学寮、散位寮などに属している者がほとんどである。東人も、大学寮から経師として派遣された、そんな役人の一人だった。

長屋王が〈父母の追善供養と聖武天皇ならびに代々天皇のために〉と発願した写経は、なぜか、いつになく急いでいるようだった。そのため、東人ら写経生は、寝ているときと食事をしているとき以外はほとんど働きづめに働かされた。浄衣として貸与された袍、袴、汗

衫、褌などが汗と垢にまみれて黒ずんできても、洗濯する時間さえ与えられなかった。下痢や吹き出物に悩まされ、腰痛に苦しみ、何とか家で養生したいと思って、請暇解（休暇願い）を出しても、家族が病気になったり死んだりした者が優先され、東人のような独り者の退家はなかなか許可されない。

ところが、先日、半分の三百巻の書写が終わったこともあってか、ようやく東人の請暇解が受理されたのである。

「なあ、富根女」

と、東人は富根女に近寄って、肩に手を置いた。

富根女は今度は逃げなかったし、厭だとも言わなかった。

東人は、富根女を抱き寄せ、

「会いたかったよ」

と言いながら、顔を上に向かせて唇を吸った。

富根女の唇は陽のにおいがした。

富根女は、初めは、両腕を垂らして東人のするがままに任せていた。が、すぐに鼻から荒い息が漏れ出したと思うと、東人の首に両腕を回し、唇を強く押しつけてきた。

東人ももう我慢の限界だった。富根女を抱いたまま、左手で引戸を閉める。富根女の袍の裾をまくり上げて、乳房をわしづかみにした。何度か荒々しく揉むと、その手を下穿きの内

側の下腹部に下ろした。

富根女のくさむらの奥はすでに充分に潤っていた。東人が指を差し入れると、富根女が声をあげてのけぞり、履いていた藁沓の片方がはね飛んだ。

東人は、富根女を左腕で抱いたまま、左膝、右膝と順に下に突き、富根女を筵の上に寝かせた。

富根女の下穿きを剝ぎ取ると、草の汁のようなにおいが鼻腔を刺激した。

東人は、七分丈の麻の袴を脱ぐのももどかしく、富根女の身体に覆いかぶさっていった。

2

翌々日の朝、東人は守辰丁の打つ第一開門鼓が聞こえてくる前に起き出し、黒米（玄米）と自宅の畑で採れた青菜の汁、それにヒジキの煮付けという、母親が作ってくれた朝食を摂った。

家を出たときはまだ暗く、空に星がまたたいていた。

もうじき七月が終わるとはいえ、陽のあるうちはまだ暑い。が、朝晩はめっきり涼しくなった。特に早朝は空気が爽やかで、これからの仕事のことさえ考えなければ、良い気持ちだった。

東人が暮らしている平城京は、和銅三年（七一〇年）に藤原京から遷都した、東西十一里

（約五・九キロメートル）、南北九里（約四・八キロメートル）の都城である。平城宮（宮城）は、都城の北の端に平城山を背にして築かれており、その正門が朱雀門。朱雀門から、平城京の正面玄関とも言うべき羅城門まで真っ直ぐ南に伸びる大路が、側溝部分を含めた幅が二十八丈（約八四メートル）という朱雀大路だ。

朱雀大路を境に、東が左京、西が右京。左京には、北東に張り出した外京と呼ばれる部分が付いている。

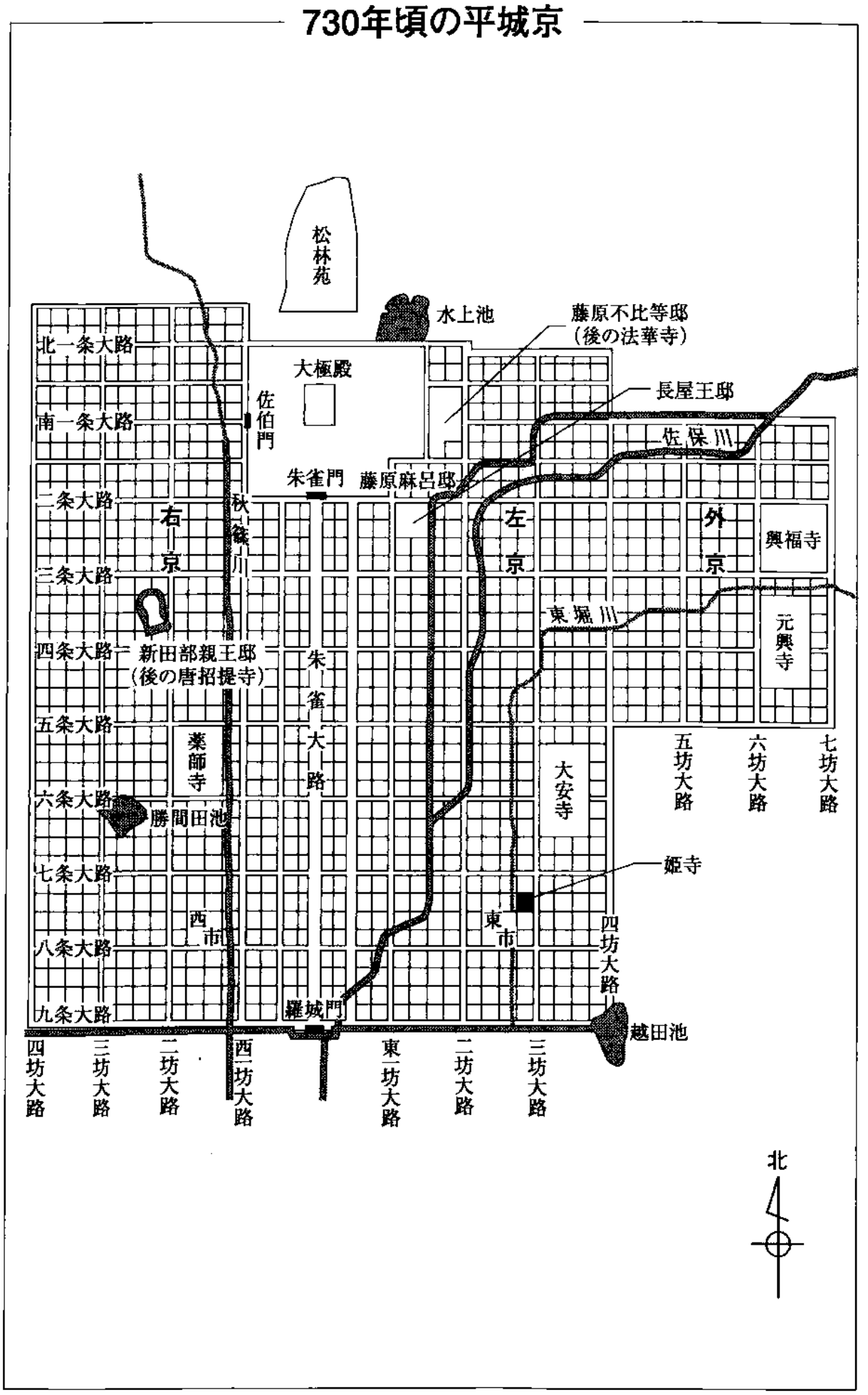
京は、東西大路（条大路）十本、南北大路（坊大路）十二本によって、一辺が一里（約五三〇メートル）から道の幅を引いた長さの方眼に区切られている。この大路に囲まれた街区が「坊」で、坊の周囲には築地塀がめぐらされ、四方の各大路に一つずつ開いている坊門以外に出入口はない。が、坊の中は、さらに縦横三本ずつの小路によって十六分割されており、その一区画が一町（大路に面している場所ほど狭いが、だいたい一四、〇〇〇平方メートル前後）である。

貴人の中には、宮城の近くに四町、五町といった広大な屋敷を与えられている者もいるが、東人の父親や富根女の父親のような下級官人の場合は十六分の一町が標準である。

東人の家は八条東四坊の一角にあった。九条東四坊が平城京の東南の端だから、左京の外れに近いところだ。

一方、東人が現在勤務している写経所は、京の北端に近い佐保川の上流にある。宮城の東

730年頃の平城京



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com